

経営と健康

第3回

日本超高層建築の父・郭茂林

講談師 一龍斎貞花

昭和43年、日本最初の超高層建築霞が関ビル完成。すべてをまとめていった郭茂林の力あったればこそで、毎日新聞は「巨塔の男郭茂林」と、その功績を称えました。

建築関係者でさえはじめて見上げる超高層ビルにふるえを覚えたほど。

当初入居企業があるか心配し、資金集めとテナント探しに三井不動産江戸社長自ら先頭に立ったほどでした。

現在のオフィスビルのエレベーターは、配置、台数、速度など霞が関ビルで確立された理論が基礎になっています。使いやすさが活かされています。地震に強く住みやすさが郭の建築哲学。

従来のビルは、下の階の方が、賃貸料が高かったが、霞が関ビルは、アメリカの超高層ビルの家賃体系を参考に

上の階ほど高い家賃とし、「何故」という質問に、「景観抜群の窓を売ってるんですよ」と茂林。今は当たり前ですが当時としては、大変な先覚者。

三井不動産管理部の田中計画課長代理は、手動式計算機で採算確保のための計算をし、後に田中代理は社長に就任しています。

連日展望台に多くの人が登り、三井不動産への入社希望者も増え、発展への大きな要因となりました。

この霞が関ビル、現在築四十九年、建て直すかどうか、もうすぐ決定されることでしょうか。

建て直しとなれば、建築工事、資材納入企業は見逃せません。イヤ水面下ではかなりの動きがあることでしょうか。

世界貿易センタービル設計企画室長

郭茂林は、二年後世界貿易センタービル設計企画室長として招かれるや、38階建て予算150億円が、180億円と30億円もオーバーしていたのを、逆打工法さかうちこうほうを採用、施工材料を節約、工期の短縮、更に2階増やして38階計画を40階建てとし、30億円を削り予算通りで1970年3月完成。

正にマジックのようで、今郭さんが生きていらつしゃったら、オリンピックの工事費予算オーバーもかなり抑えて、スムーズにいくんじやないでしょうか。

もともと順風満帆とばかりはいきませんで、貿易センタービルの足元は浜松町の駅、周囲は戦後まもなく建てられた木造モルタル塗りの建物が多く、

2階建ての建物に針金で止めてある看板がビル風で飛んでしまう。電波障害でテレビが見えなくなった。ビルの陰になって日照時間が短くなった。車の出入りが多く、騒音と排気ガスがまき散らされているなどと、抗議が寄せられるなど。これらは今も、ビル、マンション建設反対運動の理由となっています。

欠点は謙虚に反省しながら対策を十分に配慮し、都市問題の解決を図ることが肝心と郭は考えていました。

通信衛星が出来、ビル風対策も進みます。しかし、新しい東京スカイツリーでさえ、その近くは場所によって、スマホ、電話の子機、古いラジオなど影響が全くないとは言いません。私の自宅はそれを感じています。

ビルが林立する都心に、憩いのための緑地を設け、車回しのスペースも自前で確保できるようにしたものは、超高層化実現によるもの。超高層はあくまで一つの手段で、地区全体で超高層の利点や、欠点をきちんと認識出来れば、街の再開発にこれほど有力な方法はないと考える郭の活躍は、次々と発揮されていきます。

中でも、東京駅前の都庁を新宿へ移転を大問題とする新宿副都心の街づくりは、難問山積でした。

都庁移転と、新宿副都心構想

1970年、昭和45年当時新宿は、25階建ての中高層建築しか許可されていなかった。

副都心に名乗りを上げている民間11社。いずれも大企業。東京都の他、電電公社、三井不動産、住友不動産、住友商事、大成建設、熊谷組、小田急、第一生命、安田火災、東京建物、京王プラザホテル。これらの大企業が、「こうしてくれ、ああしてほしい」と自己主張したら、それこそ收拾がつかない。

中に立つて調整する。建てることよりの調整が一番大変だったかもしれない。こうした大地主の意見を統合して、新しい公共的都心づくり。これを一つにまとめていかなければいけない。新宿副都心協議会のまとめ役となり、建築協定締結にこぎつけ、地主全員が特定街区指定を受けられれば、容積のボーナスがもらえるよう地区計画のお膳立てにエネルギーを注ぎます。

敷地面積34ヘクタール、淀橋浄水場を別の所へ移して大規模な街区づくり。大規模街区構成。浄水場が移転した跡に、小田急商店街が出来、サラリーマン時代ここに出店した店の、私責任者として派遣され、連日大勢のお客様で大賑わいでした。

一つの地区4千坪で分割され、超高層建築の開発。地域の冷暖房設備は、地区内に東京ガスの本社があり、各ビルに熱水、冷水を提供し、各ビル独自で冷暖房設備をする必要なし。計画区域内の道路は、グリーンベルトを設け、歩行者専用道路をつくり、大規模な公共駐車場を共同で建設するなど、多様な計画を立て、新宿副都心設計企画室

長郭茂林の腕の見せどころです。

郭の設計は、まず機能から始め、最後に外観を彫刻家などに頼んだりして、少しいだけ外観を整える。機能より奇抜な設計をする有名設計者もいますが、郭はまず使いやすさ、機能を大事にするのです。

こうして1971年5月 副都心第一号建物、47階建ての京王プラザホテルを皮切りに、新宿三井ビル、センチュリーハイアットホテル、新宿第一生命ビルを、茂林が担当し建設。

その他、次々と高層ビルが建てられます。このうち新宿住友生命ビルの工事中、芸界に入りラジオカーに乗っておりまして、ヘルメットをかぶって上階へ。地上210メートル 52階、通称住友三角ビル、三角の真ん中は空間、足元から下が見えるんですから。震える声で放送したことを覚えています。

1991年1月、48階都庁第一本庁舎建設により新宿副都心完成。新宿駅歩道も両側に設置。夕方は反対に駅の方へと、動く方向を転換。当初は、都庁のお役人用の動く歩道だなどの声

もあつたが、ホテルやほかのビルの催事に行く人、観光客の足になっている。茂林が、第一号を建ててから二十年の歳月がかかったのです。

都庁が移転した跡地、東京駅前もすつきりと整備され、この新宿副都心の成功が、以後各地の副都心づくりへの先駆けとなりました。

この間、かつて第二次世界大戦のA級はじめB・C級戦犯を収容していた巣鴨プリズン、東京拘置所跡に高層ビル街を建設しようという計画においても、新都市開発センターの建築顧問をつとめ、昭和53年4月、地上60階、高さ240メートルのサンシャイン60ビル完成、続いて10水族館、プラネタリウム、ショッピング街のある地上10階の舶来館。劇場、博物館などのある地上12階の文化会館、地上37階のホテルが完成。55年4月の着工から2年で池袋型ともいわれたサンシャインシティ完成。展望台が大人気で今も多く観光客が訪れ、都庁の展望台にも外国人観光客が訪れている。

表面に出ないものの、調整役郭の大きな力があつたのです。■